俳句にカワイイを（後編）

高橋 真紀子

今、ニッポン発の「カワイイ」文化が国内外を沸かせていて、滑稽俳句にも「カワイイ」はよく合う…。前回はそんな話を書いた。今回は俳人たちの句集を開いてカワイイ句を探る。

まずは、漂白の俳人、種田山頭火。山頭火はカワイイの名手である。例えば、

山のいちにち蟻もあるいてゐる
閉めて一人の障子を虫が来てたたく
ぬくうてあるけば椿ぽたぽた

生き物と自らを同じ立ち位置に置いた様々な描写は、何とも微笑ましくて、自然と俳句全体がカワイらしく仕上がってしまう。

文豪夏目漱石の場合。正岡子規に「滑稽なら漱石」と言わしめた滑稽句の達人だが、知的な作品が多い。カワイイ句は、どうかと思ったが・・・あった。

朝皃の葉影に猫の眼玉かな

明治三十八年、小説「吾輩は猫である」が発表された年の一句。アサガオの葉影で目をくりくりさせてこちらを見ているのだろうか。小説のモデルの猫かと思うと、クスっとくる。

子規の句集からは、

桃の如く肥えて可愛や目口鼻

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

が目に留まった。「桃のように肥える」とはカワイイ表現だ。明治三十五年、満三十四歳で亡くなる少し前の句。病でやつれた子規の目に、桃のように肥えた（恐らく女の子）は、眩しいばかりであったに違いない。いたわしい滑稽でもある。

一方、現代の滑稽俳人たちの作品はモダンだ。「平成の滑稽」（本阿弥書店）からいくつか挙げる。（敬称略）

肘張つてこの池を出ずあめんぼう　　八木健
土筆生ふオモチャの兵隊さんのごと　藤井儀和
雨蛙グリコのおまけの如きかな　　岩村加寿夫

小さな命の描写は、まるで今風「山頭火」だ。

春の服飛び出してゐる臍ピアス　　三木蒼生
さくらんぼネイルアートの指が摘む　岩村加寿夫
眉までも秋色に染め女子高生　　雲木泉

こちらは、今時のカワイイファッションを見事に写生している。（恐らく、作者はカワイイというより「奇抜で滑稽」とお感じになったのだとお察ししますが）。

このように、カワイイ句は「前編」でも指摘した擬人化、そして、カワイらしさの写生句が多い。そんな中で前衛的なのは、

三月の甘納豆のうふふふふ

俳人坪内稔典氏の有名な作品だ。句の意味に注目が集まるが、私は語感のカワイさがとても好きだ。ちなみに、甘納豆の句は一～十二月まであり、ご自身を甘納豆に重ねておられるのだとエッセイで知った。

さて、人の句を論じるのはこの辺りにして、私も何か、カワイく詠まねば。

（次号へつづく）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。